

10月29日より大公開

3館共通・上映時間	10:50	1:20	4:10	7:00

ヒビヤ
千代田劇場
☎591－1716

ハチ公前
渋谷宝塚
☎461－8779

上野駅前
上野東宝
☎831－3431

姿三四郎

すがたさんしろう

岡本喜八監督作品 富田常雄原作

東宝

東宝映画製作／東宝配給
《カラー作品》
パナビジョン

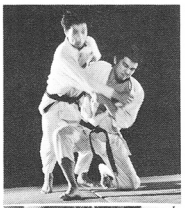
●かいせつ

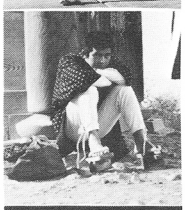
「姿三四郎」は東宝がオールスターキャストで放つ秋の超大作です。

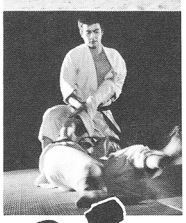
昭和十七年に出版された富田常雄の原作は翌十八年、黒澤明監督により映画化されました。明治十五年から二十年、怒濤のように押し寄せた西洋文化の前に、みるみる衰退していった日本の柔術諸流。その中で、日本人の心を失わなかった一握りの人々が、やがて新しい「柔道」を完成させていきます。

凄絶な決闘、清純な恋。波瀾の青春をまざまざと生きた青年「姿三四郎」は、昭和四十年にも内川清一郎監督によって再度映画化されました。

今回は、このアクティブでドラマティックな素材に岡本喜八監督が挑みます。







●ものがたり

姿三四郎は会津の生まれ。父も母もすでにない。かなりのあばれん坊で、柔術だけはめっぽう強い。ふとしたきっかけで鎮台兵相手に大立ちまわりを演じてしまった彼は、先輩の安吉とともに故郷を去り、東京に出た。

時は明治十五年。東京は文明開化に湧いていた。三四郎は、俥挽きをしながら柔術の師を探しもとめた。

三四郎が門馬三郎の道場に入門を求めた日、門馬と弟子たちは、矢野正五郎に闇討ちをしかけた。大学出で、理論的な柔道の確立をめざす正五郎は、多くの柔術家の反感をかっていた。門馬と弟子たちを、またたくまに投げとばした正五郎を見て、三四郎はその場で、彼の弟子になった。

正五郎によって技をみがかれた三四郎の腕は、みるまに上達した。とくに、かれの得意技〝山嵐〟にかけては、並ぶものがないほどになった。

正五郎のひきいる講道館柔道は、警視庁の武道師範の座をかけて、良侈心当流の村井半助と闘うことになる。この試合に選ばれた三四郎は、村井の娘、乙美と知り合い、胸をときめかせる。父の勝利を祈る乙美は、三四郎を父の相手とは知らず好意を寄せた。

三四郎は全力を尽して村井を倒した。村井は、その時受けた打ぼくがもとで他界する。村井の弟子であり、乙美の許婚者と自認していた檜垣源之助は、三四郎に決闘を申し入れた。優れた柔術家として名高い飯沼恒民の立ち合いのもとに、二人は右京ガ原で相対した。死闘の末、源之助を倒した三四郎は、講道館を去り、修業の旅に出た。

その三四郎を源之助の二人の弟、鉄心と源三郎がつけまわす。二人は兄を超えた空手の達人だ。

三四郎をつけまわすのはこの二人だけではない。日本の軍閥化をおそれる子爵南小路光康の娘、高子は、ふとした事故で知り合った三四郎に恋心を抱く。しかし、三四郎には初恋の人乙美がいる。乙美は、お仙の経営する牛肉屋に勤めながら、あくまでも三四郎を待っている。

こうしたかかわり合いの中で、三四郎は、激動の時代をせいいっぱいに生きていく。そして、彼の行く先には、鉄心、源三郎との対決が待っていた……

●キャスト

姿三四郎	三浦友和
矢野正五郎	仲代達矢
村井半助	若山富三郎
村井乙美	秋吉久美子
檜垣源之助	中村敦夫
檜垣鉄心	矢吹二朗
檜垣源三郎	宮内洋
南小路光康	芦田伸介
南小路高子	神崎愛
門馬三郎	中谷一郎
おすみ	浅野ゆう子
お仙	草笛光子
おもん	岸田今日子
安吉	田中邦衛
折口大助	岸田森
三島通庸	田崎潤
飯沼恒民	丹波哲郎
玄沙和尚	森繁久彌

●スタッフ

製作●貝山知弘
原作●富田常雄（講談社版 新潮文庫）
脚本●隆巴
監督●岡本喜八
撮影●木村大作
美術●阿久根厳
録音●田中信行
照明●小島真二
音楽●佐藤勝
編集●黒岩義民
スチール●石月美徳
助監督●山下賢章
製作担当●森知貴秀

